

# 日本における企業と組織の社会学再考

日本学術振興会 学振PD (法政大学)

園田薫

# 目次

- 本報告の目的
- 経営・経済現象を扱う領域社会学
- 企業と組織を捉える社会学的視座
- 経営現象を社会学的に捉える難しさ
- 企業と組織の社会学再考

# 本報告の目的

- 社会学において経営現象に関わる企業と組織を対象とした研究は、どのように営まれてきた／営まれていくべきなのかを検討すること。
- 経営現象に踏み込んだ労働社会学的研究が必要（伊原 2021）だと指摘されるが、なぜ近年における企業・組織研究の蓄積は乏しい（ように見える）のか？

# 本報告の目的

□むしろ近年は企業の活動を視野に入れた社会学的論考が活発に出版されているようにも見える



□これらは、「経営現象に踏み込んだ労働社会学的研究」ではないのか？



# 本報告の目的

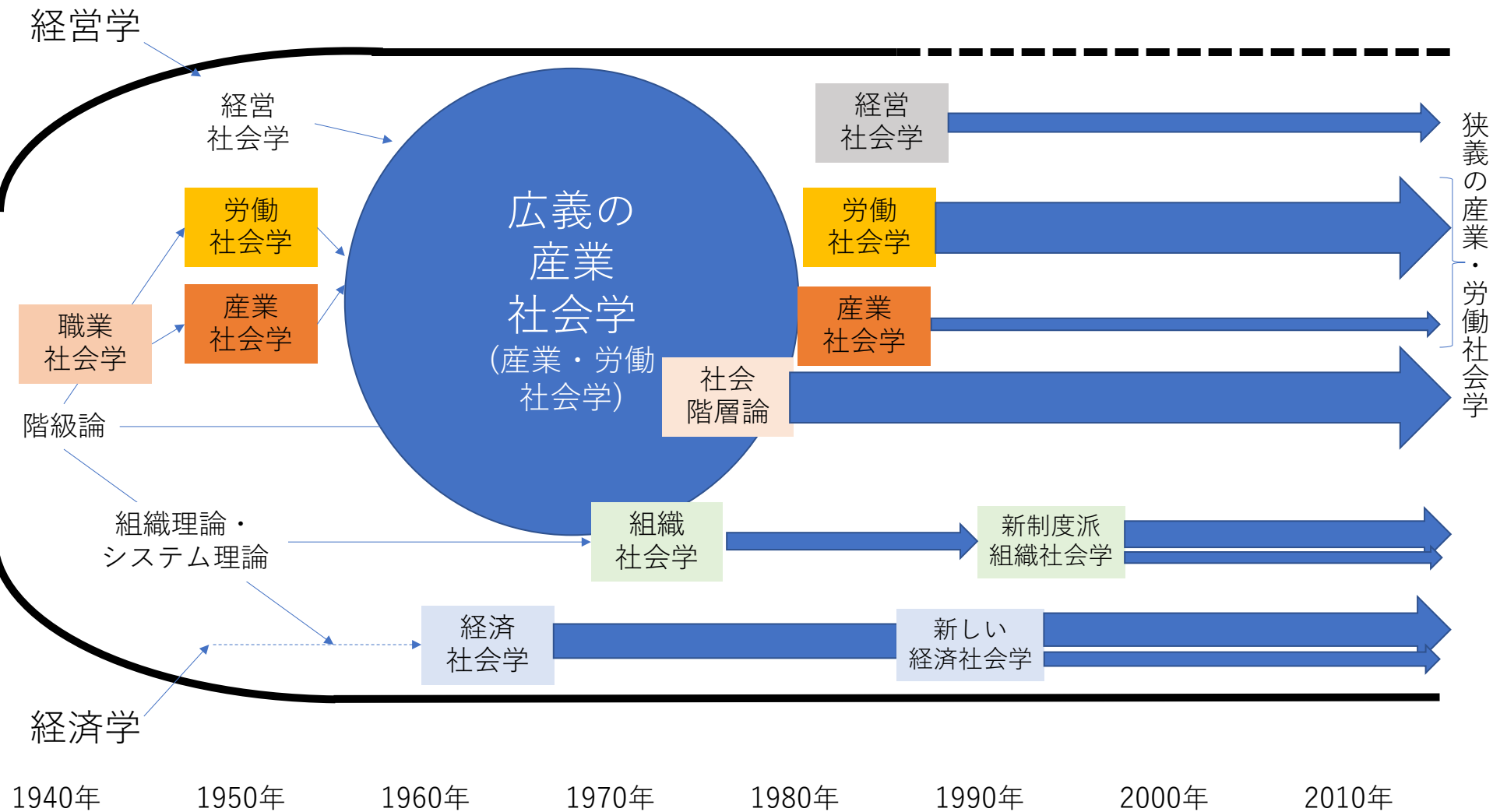
- 以上を検討するため、下記の通り議論を進める。
- ① 社会学における経済・経営現象を扱った研究の流れを、領域社会学という単位で整理する。
  - ② どのように企業と組織を捉える視座が社会学のなかで培われてきたのかを俯瞰する。
  - ③ なぜ経営現象に踏み込んだ社会学的考察が少ないように見えるのかを考察する。
  - ④ 経営現象を扱う社会学の新たな可能性について、若干の考察を加える。

# ① 経営・経済現象を扱う領域社会学

- 『21世紀の産業・労働社会学』では経済・経営現象にかかわる領域社会学を取り上げ、それらがどのようにして発展してきたのかをまとめた
- 日本で勢力を誇った産業・労働社会学は、それぞれの領域社会学を専門とする研究者の「呉越同舟」を生むも、理論的・方法的・イデオロギー的対立のなかで瓦解していった歴史がある



# ① 経営・経済現象を扱う領域社会学



# ① 経営・経済現象を扱う領域社会学

## □ 労働における二つの側面

### ➤ 負の側面：格差、搾取、疎外

「資本家によって労働力は搾取されている。労働は資本家階級と労働者階級の間に深刻な格差をもたらし、人間らしさを奪っていく」

### ➤ 正の側面：連帯、自由、生きがい

「労働によって人々はつながりを得ることができ、労働によって人々は賃労働社会を自由に生活し、生きがいを得ることが可能である」



## ① 経営・経済現象を扱う領域社会学

□前者はマルクスが、後者はウェーバーが、それぞれの理論的な支柱となっている

→それぞれの主張に立脚する形で、社会学的な研究が蓄積されてきた

– マルクス的な発想：**労働社会学**につながる  
(社会運動論、一部の階層研究などへ波及)

– ウェーバー的な発想：**職業社会学**につながる  
(産業社会学、経営・組織研究などへ波及)

## ① 経営・経済現象を扱う領域社会学

□ この2つの合流点となった産業社会学では、労働者の共同性・主体性に影響する制度的・組織的要因を検討しようと、企業や組織に関する論考を取り込みはじめた

= 「労働者」研究から「企業・組織」研究に派生

→ こうしたなかで、労働と経営を対置し、経営に傾斜した産業社会学への批判が、労働社会学のなかから噴出した

(「経営現象に踏み込んだ労働社会学的研究」)

## ②企業と組織を捉える社会学的視座

- 以上は「労働者」の研究を目指す社会学である一方、メゾレベルの組織という存在を理論的に扱おうとする研究が、脈々と蓄積されてきた（官僚制、フォーマル/インフォーマル組織...）  
－ ウェーバー、マートン、セルズニック、ブラウ...
- さらに独立した研究群として存在していた社会システム理論の研究が、部分的に組織研究と混ざり合っていく（富永 1997）

## ② 企業と組織を捉える社会学的視座

- この議論を日本で積極的に導入してきたのが、経済社会学と組織社会学である。
- 経済社会学：ウェーバーやジンメル、スメルサーなどの経済現象に対する理論的考察を、マクロなシステムとの関連において拡張する立場
- 近年はグラノヴェッターを旗手として、**人々が埋め込まれた社会関係**に着目する新しい経済社会学（New Economic Sociology）の影響が強まっている。

## ②企業と組織を捉える社会学的視座

- 組織社会学：ウェーバーやブラウ、セルズニックらによって論じられてきた組織構造に関する旧制度派の議論を展開し、システム理論などの純理論的考察をその射程に含めながら拡大。
- マイヤー・ローワン、ディマジョ・パウエルなど、アメリカを中心として**環境への認知が組織の制度化を方向づける**とする新制度派の組織理論が流行すると、日本の社会学でもその理論的な導入が進められた。

## ② 企業と組織を捉える社会学的視座

□ 企業組織を扱った近年の研究では、  
**新しい経済社会学・組織社会学の  
理論的視座が採用されることが多い**



- ✓ 経済学・経営学との差異化
- ✓ 既存の視座に対する〈新しい〉経済・組織社会学（≒米国の社会学）の影響



### ③ 経営現象を社会学的に捉える難しさ

□ 〈新しい〉社会学の視座を導入している研究はあるにもかかわらず、なぜ近年における企業・組織研究は乏しいように見えるのか？

#### ➤ 3つの可能性

1. 産出される研究の総量の問題
2. 社会学の研究に占める割合の問題
3. 産出される研究が可視化されていない可能性

### ③ 経営現象を社会的に捉える難しさ

#### □ 企業・組織研究の総量・割合に関する問題点

✓ 企業研究の組織化の難しさ（複数の研究者で大規模な企業調査を組織化する困難さ）

- 企業調査の減少

- 調査拠点となる組織・旗手の減少

✓ ブルーカラー研究からホワイトカラー研究へ

- 対象となる現場や論点の拡散



### ③ 経営現象を社会的に捉える難しさ

□ 産出される研究が可視化されていない可能性

→ 領域・連字符社会学（経済・組織社会学）の  
存在感が薄い？

→ 「組織社会学」「経済社会学」や「社会学」と  
いう単語もなかなかタイトルに出てこない現状



## ④ 企業と組織の社会学再考

- 社会学的研究としての魅力を保ち、なおかつ社会学の内部/外部にそれをアピールする必要性
  - 領域社会学としての凝集性と存在感の向上
  - 「社会学」という学問のもつ魅力のアピール
  
- 日本の社会学における企業・組織研究は、  
〈新しい〉経済社会学・組織社会学への  
キャッチアップで十分なのか？

## ④ 企業と組織の社会学再考

- 前者は『21世紀の産業・労働社会学』にて議論したので、本報告では後者について考察する。
- むしろ経営学や組織論において社会学と通底する学問的視座を有した理論・実証研究のなかに、「社会学としての魅力」のヒントがあるのでは
- ✓ 個人的に紹介したいのは、以下の2つ
  - ワイクのセンスメイキング理論
  - サダビーのレトリカル・ストラテジー研究

## ④ 企業と組織の社会学再考

- センズメーカーキング：Weick（1995=2001）によって提唱された概念。組織行動や意思決定が、成員がそれに納得できるような認識や意味を共有することで成り立っているとする考え方。
- 組織を固定的な客体ではなく、組織“化”という動的プロセスによって捉える
  - 組織は「その組織たる所以」がシンボリックに生成され、それを認識し、意味解釈・意味づけすることで領域設定がなされている

## ④ 企業と組織の社会学再考

- 組織論だと、新制度派の議論は制度的実践 (Institutional work) に関する研究に派生しており、なかでもSuddabyの議論は注目に値する
  - 制度はそれに関わるアクターによって目的的に創造・維持・破壊されているという考え方
- Suddaby & Greenwood(2005)は、制度的実践のなかで用いられる修辞に着目し、それがいかに正統性を獲得するための戦略となっているのかを検討している。

## ④ 企業と組織の社会学再考

□ 2つの理論や分析視座がもつ魅力

= 企業や組織における「主体」の設定問題に関わる論点が提起される点

→ 組織における「主体」とは何か？

□ 企業・組織とは、社会を構成する一要素であると同時に、個人との関係においては一つの社会を構成する、メゾレベルの存在である

→ この考察を深められることが社会学の魅力ではないのだろうか

# 参考文献

- 畑山要介, 2016, 『倫理的市場の経済社会学』学文社.
- 伊原亮司, 2021, 「分野別研究動向（労働・産業・経営）」『社会学評論』72(1): 37-57.
- 今井順, 2021, 『雇用関係と社会的不平等』有斐閣.
- 松永伸太郎・園田薫・中川宗人, 2022, 『21世紀の産業・労働社会学』ナカニシヤ出版.
- 野瀬正治, 2020, 『経営社会学』大学教育出版.
- 小川慎一, 2020, 『日本的経営としての小集団活動』学文社.
- 桜井政成, 2021, 『福祉NPO・社会的企業の経済社会学』明石書店.
- 佐野嘉秀, 2021, 『英国の人事管理・日本の人理管理』東京大学出版会.
- Suddaby, R. & R. Greenwood, 2005, “Rhetorical Strategies of Legitimacy,” *Administrative Science Quarterly*, 50: 35-67.
- 富永健一, 1997, 『経済と組織の社会学理論』東京大学出版会.
- Weick, K. E., 1995, *Sensemaking in Organizations*, California: Sage. (遠田雄志・西本直人訳, 2001, 『センスメーカー イン オーガニゼーションズ』文眞堂.)